

ゴータマ・ブッダは聴衆の能力や境遇に応じて教を説いたという。仏説がそのような「対機説法」されたものであるならば、それを読み解くにあたっては、当然のこと「何を説いているか」だけではなく「誰に対して説かれたものか」という点にもじゅうぶん留意する必要があるだろう。

たとえば阿含・ニカーヤ文献は、出家比丘たちの手によって編纂され伝承された文献であるから、その大部分は、もとより出家者たちを対象に説かれている。それゆえ、多くの阿含が出家至上主義をとらえ、出家道こそ窮極の救いである、と訴えていたとしても、それはたんにゴータマ・ブッダが「出家者たちに向かっては」そのような教を説いた、という片面の事実を示しているに過ぎない。仏説の残る半面、すなわちブッダが「在家者たちに向かって」どのような教を説いたか、という疑問は、まさしくそのような、在家者たちに向かって説かれたブッダの教説を探すことによってしか理解されない。

むろんそのような、在家信者に向けて説かれた仏説とおぼしき資料が、原始仏教聖典にそう多く遺されているわけではないが、それでも現存阿含のうちに、そのような「在家法」の残滓を見いだすことは不可能ではない。今回は、長編の経典中に存するそのような資料として、いわゆる非大乘系の長編『涅槃経』（漢訳『遊行経』パーリ文『大般涅槃経』およびその諸異本）を取り上げてみたい。これら『遊行経』（非大乘系涅槃経）諸異本は、随所に在家主義的教説がちりばめられた、特異な長編経典であるように思われる。

たとえば冒頭からしてその傾向は顕著である。霊鷲山において、ブッダはヴァジ族（ヴリジ族）の種族社会を誉めたたえ、比丘サンガもかくあるべしと推奨する。しかしブッダが出家者たちに「世俗の信者たちの共同体を見習え」と教示すること自体、出家主義の価値観からはおおきく逸脱している。そしてブッダは旅の途につき、遊女や鍛冶工など、さまざまな階層の在家信者たちに教を説きつつ、ナーディカーという村では、そこで亡くなった多くの在家者たちがすべて預流以上の位に入ったことを記し、「法鏡」（dharmabimba）と称する在家者たちのための解脱法を明らかにする。さらには仏滅後、在家者たちに四大聖地を巡礼することを奨励し、仏滅後の火葬については、在家者たちの手で行うよう遺言して涅槃に入る。

なぜこのような特殊な経典が成立したのか。むろん仮説的にしか言えないが、開祖ゴータマ・ブッダの死という事実が、出家僧団のみならず、在家信者たちの間にも衝撃的な事件であったろうことは疑いを得ない。そのインパクトゆえに、おそらくブッダがその最後の旅で訪問した各地の在家信者たちの共同体には、さまざまな逸話や伝承が残されたことであろう。『遊行経』が、そういった地域の民間伝承をも吸収し、随所に取りこみながら編纂された作品であると想定するならば、これが出家教団において伝持された経典でありながら、多分に在家主義的傾向をはらむ事実も納得できるように思える。